

ミステリ読書案内

2023. 5. 30 発行元

第482号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

逢坂 剛の代表作

今度は逢坂剛の代表作についてである。私は今もっていくつかの作品を読み残しているの、真の意味での「代表作」とは言えないが、警察小説系統を中心に選んだ。また後日変更したくなるかもしれないが…。

読み残しは冒険小説系

私がまだ読んでいない主要な作品は推理作家協会賞を取った『カデイスの赤い星』や『燃える地の果てに』などの冒険小説系の作品である。大作なので手を出しかねていた。読もうという気持ちはあるのだが…。

代表作は『禿鷹シリーズ』から一冊『禿鷹の夜』、『百舌シリーズ』から一冊『百舌の叫ぶ夜』、『岡坂神策シリーズ』から一冊『あでやかな落日』。これで三冊埋まってしまった。本当のところ『しのびよる月』から始まる『御茶ノ水署シリーズ』や『相棒に気をつける』の『世間師シリー

ズ』もお気に入りなのだけれども、スケールの大きさという点で今回は選ばなかった。

逢坂剛の作品は短編にも傑作が多く、その目の付け所にハッとさせられるものがたくさんある。謎解き本格もの、パズラー作家とは全く違う感覚を感じる。私が高評価をつけているのは『幻のマドリッド通信』『コルドバの女豹』『まりえの客』『クリヴィッキー症候群』など。

逢坂作品はまだ改版、再版が作られている状況なので、書店の棚から消えることはないと思うが、未読の方は是非読んでみるとよいと思う。面白さは保証付き。

NO.3「あでやかな落日」

1997年毎日新聞社。『サンデー毎日』に連載したものを単行本にまとめたもの。『岡坂神策シリーズ』の一作となる。岡坂は現代調査研究所の所長であり、依頼を受けて各種に調査活動を実施している。

冒頭、わたし＝岡坂が無名のギタリストのコンサートを聞く場面からスタートする。クラシック・ギターを演奏する香華ハルナ。やがて、彼女をアウロラ電機の大型コンポ宣伝広告のイメージ・キャラクターにという話が持ち上がる。秘密裏に進めていた話が突然すっぱ抜かれることに…。どこから漏れたのか…。セントラル広告など各業者が入り乱れての混乱に陥っていく。それぞれの思惑が交錯する状態を逢坂らしい表現で描いている。

NO.1「禿鷹の夜」

2005年文藝春秋社。この『禿鷹シリーズ』は全部で5冊ある。本書『禿鷹の夜』がスタート。この後『無防備都市』『銀弾の森』『禿鷹狩り』『兇弾』と続く。何と言ってもこのシリーズの魅力は刑事・禿鷹にある。禿鷹富鷹秋の通称が「禿鷹」。神宮署生活安全課特捜班員。傍若無人、史上最悪の刑事。悪徳警官。とにかく自分さえ良ければという行動に徹しているのが読んでいて妙に引き付けられるのだ。文体にユーモアのかけらもなく、冷酷そのものの描き方で、ハードボイルドに通じる。

プロローグは青葉和香子と禿鷹の出会いから。暴漢に襲われたところを助けるのだが…。折しも渋谷は暴力団の渋谷興業と南米マフィアのマスダの対立の状態。ある日、渋谷興業社長の確氷はレストランで娘と食事をしているところを狙われる。銃撃でボディガードが負傷したところを居合わせた禿鷹に助けられることに。ヤクザなど歯牙にもかけない人非人なのだが…。そんなことがあって渋谷興業と禿鷹の癒着が強まる。マスダ側は新手の殺し屋・ミラグロを送り込んでくる。その魔の手が禿鷹と束の間の交流があった和香子に迫っていくことに…。禿鷹が感じたことは…。抗争、暴力。正義などどこにもない闘いが展開されていく。

No.2「百舌の叫ぶ夜」

1986年集英社。『百舌シリーズ』には逢坂の最初の長編に当たる『裏切りの日々』が0番に位置づけられているが、登場人物に重複があるだけで、ストーリーに繋がりは無い。本書『百舌の叫ぶ夜』が実質のスタートである。ドラマ化もされた有名なシリーズである。

冒頭に3つの断片が記される。最初のページに殺し屋「百舌」が登場。千枚通しを凶器にし、犯行現場に百舌の羽根を残していくのが特徴。その百舌が狙う相手の筧峻三を追いかける。筧はマンモス喫茶で女と会った。その場で殺し損ねた百舌が女の後を付けて行ったが…。再び筧を発見したけれども今度は爆弾騒ぎに巻き込まれてしまう。場面は一転。豊明興業に勤める新谷和彦が部長の赤井秀也につれられて能登半島先端の孤狼岬へ。

「爆弾」に関わっていることが一言だけ触れられる。新谷は石で殴られ崖から投げ捨てられることに。更に場面は一転。拳銃による大量処刑のような場面の映像が流れる。この後いよいよ捜査一課の大杉良太、公安部第六係の明星美希、公安部特務一課の倉木尚武という主役が登場してくる。新宿の爆弾事件に巻き込まれて亡くなったのは二人。フリーライターの筧峻三と倉木警部の妻・珠枝だったことが判明してくる。